

# 燈明之卷

泉鏡花

青空文庫



「やあ、やまかがしやまむし蝮おが居るぞう、あつけえやつだ、気をつけ  
さつせえ。」

「ええ。」

何と、あしもと足許の草へ鎌首が出たように、立すくみになったのは、  
さつまがすり薩摩ひとえ緋の単衣、あいねずみ藍鼠ろ無地の紹の羽織で、身軽いでたに出立った、  
都会かららしい、旅の客。——近頃は、東京でも地方でも、まだ

時季が早いのに、慌てもののせいか、それとも値段が安い**ためか**、  
道中の晴の麦稈帽むぎわらぼう。これが真新しいので、ぎつと、年よりは少わか

く見える、そのかわりどことなく人体にんていに貫目のないのが、吃びつく驚りした息もつかず、声を継いで、

「驚いたなあ、蝮は弱つたなあ。」

と帽子の鍰つばを——薄曇りで、空は一面に陰気なかわりに、まぶしくない——仰あおむ向けに崖がけの上を仰いで、いま野良声を放つた、崖縁つたにのそりと突立つたつ、七十余りの爺じいさんを視みながら、蝮は弱つたな、と弱つた。が、実は蛇ばかりか、蜥蜴とかけでも百足むかででも、怯おびえそ  
うな、据すわらない腰つきで、

「大変だ、によるによる居るかーい。」

「はああ、あアに、そんなでもねえがなし、ちよくちよく、鎌首をつん出すでい、気をつけさせるがよかんべでの。」

「お爺さん、おい、お爺さん。」

「あんだなし。」

と、谷へ返答だまを打込みながら、鼻から煙を吹上げる。

「煙草たばこせん錢ぐらい心得るよ、煙草錢を。だからここまで下りて来

て、草生くさつぽの中を連戻してくれないか。またこの荒墓あれはか……」

と云いかけて、

「その何だ。……上の寺の人だと、悪いんだが、まったく、これは荒れているね。卵塔場へ、深入りはしないからよかつたけれど、今のを聞いては、足がすくんで動かないよ。」

「ははははは。」

鼻のさきに漂ただよう煙が、その頸ほんのくぼ窪くぼのあたりに、古寺の破やれびさ

廂しを、なめくじのように這はった。

「弱え人だあ。」

「頼むよ——こっちは名僧でも何でもないが、爺さん、爺さんを……導きの山の神と思うから。」

「はて、勿もつたい体もねえ、とんだことを言うなつす。」

と両ふたつ提さげの——もうこの頃では、山の爺が喫のむ煙草がバツトで差支えないのだけれど、事実を報道する——根ね附つけの処を、独とつこ鈷このももひように振りながら、煙管きせるを手弄てなぶりつつ、ぶらりと降りたが、股ももひ引きの足あしごしら拵しらえだし、腰達者に、ずかずか……と、もう寄った。

「いや、御苦労。」

と一基の石塔の前に立並んだ、双方、膝の隠れるほど草深い。

實際、この卵塔場は荒れていた。三方崩れかかった窪地の、ど  
 こが境というほどの杭く一つあるのでなく、折朽おれくちた古卒都婆ふるそとばは、  
 黍きび殻がら同然に薙伏なぎふして、薄暗いと白骨に紛れよう。石碑も、石塔  
 も、倒れたり、のめつたり、台に据っているのはほとんどない。  
 それさえ十ウの八つ九つまでは、ほとんど草がくれなる上に、積  
 った落葉うもに埋うもれている。青あお芒すすきの茂った、葉越しの谷底の一方  
 が、水田に開けて、遙々はるばると連る山が、都に遠い雲の形で、蒼あおぞ  
 空らに、離れ島かと流れている。

割合に土が乾いていればこそで——昨日きのうは雨だったし——もし  
 湿地だったたら、蝮、やまかがしの警告がないまでも、うっかり一  
 歩も入いれなかつたであろう。

それでもこれだけ分入るのさえ、樹の枝にも、卒都婆にも、苔こけの露は深かった。……旅客の指の尖さきは草の汁に青く染まっている。雑樹ぞうきの影が沁しむのかも知れない。

蝙蝠こうもりが居そうな鼻の穴に、煙は残って、火皿に白くなつた吸殻を、ふつつつと、爺てのひらしわは掌の皺わに吹落し、眉をしかめて、念のため、火の気のないのを目でためて、吹落すと、葉末にかかつて、ぼすぼすと消える処を、もう一つ破草履やれぞうりで、ぐいと踏んで、

「ようござらっせえました、御参詣ごさんけいでがすかな。」

「さあ……」

と、妙な返事をする。

「南無なむ、南無、何かね、お前様、このお墓に所縁しよえんの方でがんすか



なす。」

胡桃くるみの根附を、紺小倉のくたびれた帯へ挟んで、踞しゃがんで掌を合せたので、旅客も引入れられたように、夏帽を取って立直った。

「所縁にも、無縁にも、お爺さん、少し墓らしい形の見えるのは、近間では、これ一つじゃあないか——それに、近い頃、参詣があったと見える、この線香の包紙のほぐれて残ったのを、草の中に覗のぞいたものは、一つ家の灯やのように、誰だつて、これを見当みあてに辿りつくだろうと思うよ。山路やまみちに行暮れたも同然じゃないか。」

碑おもとての面の戒名は、信士とも信女しんによとも、苔に埋れて見えないが、三つ蔦づたの紋所が、その葉の落ちたように寂しく顕あらわれて、線香の消残った台石に——田沢氏——と灰ほのかに読まれた。

「は、は、修行者のように言わっしやる、御遠方からでがんすかの、東京からなす。」

「いや、今朝は松島から。」

と袖を組んで、さみしく言った。

「御風流でがんす、おたのしみでや。」

「いや、とんでもない……波は荒れるし。」

「おお。」

「雨は降るし。」

「ほう。」

「やつと、お天気になったのが、仙台からこつちでね、いや、馬鹿々々しく、かえ皈かえつて来た途中ですよ。」

成程、馬鹿々々しい……旅客は、おがた小梟、ほんはい凡杯——と自称する俳人である。

この篇の作者は、別懇の間柄だから、かけかまいのない処を言おう。食い続きは、細々ながらどうにかしている。しかるべき学校は出たのだそうだが、ある会社の低い処を勤めていて、俳句は好きばかり、むしろ遊戯だ。処で、はじめは、凡俳、と名のつたが、俳句を遊戯に扱うと、近来は誰も附合わない。第一なぐられかねない。見ずや、きみ、やかなの鋭きあいくち匕首をもって、骨を削り、肉を裂いて、じんせい人性の機微を剔ぬき、十七文字で、大自然の深し奥んおうを衝つこうという意気込の、先輩ならびに友人に対して済まぬ。はばか憚り多い処から、「俳」を「杯」に改めた。が、一いっさん盞献せんずるほ

どの、余裕も働きもないから、手酌で済ます、凡杯である。

それにしても、今時、奥の細道のあとを辿たどつて、松島見物は、

「凡」過ぎる。近ごろは、独逸ドイツ、仏蘭西フランスはつい隣りで、マルセイ

ユ、ハンブルク、アビシニヤごときは津々浦々の中に数えられそ

うな勢いきおい。少し変つた処といえ、獅子狩ししがりだの、虎狩だの、類人猿

の色のもめ事などがほとんど毎月の雑誌に表われる……その皆が

みんな朝夷あさひな島めぐりや、おそれ山の地獄話でもないらしい。

最近も、私を、作者を訪ねて見えた、学校を出たばかりの若い

人が、一月ばかり、つい御不沙汰ごぶさた、と手軽い処が、南洋の島々を

渡つて来た。……パイ、チョコ、キイ、キコと鳴く、青い鳥だの、

黄色な鳥だの、可愛らしい話もあつたが、聞く内にハツと思つた

のは、ある親島から支島<sup>えだじま</sup>へ、カヌウで渡った時、白熱の日の光に、藍<sup>あゐ</sup>の透通る、澄んで静かな波のひと処、たちまち濃い萌黄<sup>もえぎ</sup>に色が変った。微風も一縷雲もないのに、ゆらゆらとその潮が動く、水面に近く、颯<sup>さつ</sup>と黄薔薇<sup>きばら</sup>のあおりを打った。その大さ<sup>おおき</sup>、大洋の只<sup>ただな</sup>中に計り知れぬが、巨大なる<sup>えい</sup>の浮いたので、近々と嘲<sup>あざ</sup>けるような黄色な目、二丈にも余る青い口で、ニヤリとしてやがて沈んだ。海の魔宮の侍女であろう。その消えた後も、人の目の幻に、船の帆は少時<sup>しばし</sup>その萌黄の油を塗った。……「畳で言いますと」——話し手の若い人は見まわしたが、作者の住居<sup>すまい</sup>にはあいくく八畳以上の座敷がない。「そうですね、三十畳、いやもつと五十畳、あるいはそれ以上かも知れなかつたのです。」と言うのである。

はんにちびま  
 半日隙とも言いたいほどの、旅の手軽さがこのくらいである  
 処を、雨に降られた松島見物を、山の爺じじいに話している、凡杯の談  
 話ごときを——読者諸賢——しかし、しばらくこれを聴け。

## 二

小泉凡杯は、はじめて旅をした松島で、着いた晩と、あくる日  
 を降籠ふりこめられた。景色は雨に埋うずもれて、竈かまどにくべた生薪なままきのいぶ  
 ったような心地がする。屋根の下の観光は、瑞巖寺ずいがんじの大将、し  
 かも眇かために睨にらまれたくらいのもので、何のために奥州へ出向いたの  
 か分らない。日も、懐中ふとこも、切詰めた都合があるから、三日め

の朝、旅籠屋はたごやを出で立つと、途中から、からりとした上天氣。

奥羽線の松島へ戻る途中、あの筋には妙に豆府屋が多い……と聞く。その油揚揚げろうが陽炎を軒に立てて、豆府のような白い雲が蒼あ空おぞらに舞っていた。

おかしな思出はそれぐらいで、白河近くなるにつれて、東京から来がけには、同じ処で夜よがふけて、やっぱりざんざん降ふりだった、雨ステエシヨンの停車場の出はずれに、薄ぼやけた、うどんの行燈あんどう。雨脚も白く、真盛まっさかりの卵うの花が波を打って、すぐの田畝たんぼがあたかも湖のように拡がって、蛙かえるの聲が流れていた。これあるがためか、と思つたまで、雨の白河は懐しい。都をば霞とともに出でしかど……一首を読むのに、あの洒落しやれものの坊さんが、頭を天日に曝さらし

たというのを思出す……「意気な人だ。」とうっかり、あみ棚に預けた夏帽子の下で素頭すこうべを敲たたくと、小県はひとりで浮うっかり笑った。ちよつと駅へ下りてみたくなつたのださうである。

そこで、はじめて気がついたらと云うのでは、まことに礼を失するに当る。が、ふとこの城下を離れた、片原というのは、渠かれの祖先の墳墓の地である。

海も山も、齊ひとしく遠い。小県凡杯は——北ほつこく国の産で、父も母もその処の土となつた。が、曾祖、祖父、祖母、なおその一族が、それか、あらぬか、あの雲、あの土の下に眠つた事を、昔話のように聞いていた。

——家は、もと川越かわごえの藩士である。御存じ……と申出るほど



の事もあるまい。石州浜田六万四千石……船つきの湊みなとを抱えて、内福の聞こえのあつた松平某なにがし氏が、仔細しさいあつて、ここの片原五万四千石、——遠僻えんぺきの荒地に国がえとなつた。後に再び川越に転封てんぼうされ、そのまま幕末に遭遇した、流転の間に落ちこぼれた一藩の人々の遺骨、残骸ざんがいが、草に倒れているのである。

心ばかりの手向たむけをしよう。

ふりようけん  
 不了簡ふりようけんな、凡杯も、ここで、本名の銚吉せんきちとなると、妙に心あらたが更まる。煤すすの面つらも洗おうし、土地の模様も聞こうし……で、駅前たよの旅館へ便たよつた。

「姉さん、風呂には及ばないが、顔が洗いたい。手水ちようず……何、洗面所を教えておくれ。それから、午飯おひるを頼む。ざつとでいい。」

二階座敷で、遅めの午飯したたを認める間に、様子を聞くと、めざす

場所——片原は、五里半、かれこれ六里遠い。——

鉄道はある、が地方のだし、大分時間が費かかるらしい。

自動車の便はたやすく得られて、しかも、旅館の隣が自動車屋  
だと聞いたから、価値ねだんを聞くと、思いのほか廉れんであった。

「早速一台頼んでおくれ。……このちよつとしたものだが、荷物は預けて行きたいと思う。……成るべく、日暮までに帰つて、すぐ東京へ立ちたいのだがね、時間の都合で遅くなつたら一晩厄介になるとして——勘定はその時と——自動車は、ああ、成程隣りだ。では、世話なしだ、いや、お世話でした。」

おもてはしご  
表階子を下りかけて、

「ねえさん。」

「へい。」

「片原に、おつこち……こいつ、棚から牡丹餅ぼたもちときこえるか。——恋人でもあつたら言ことづ伝けを頼まれようかね。」

「いやだ、知りましねえよ、そんなこと。」

「ああ、自動車屋さん、御苦労です。ところで、料金だが、間違はあるまいね。」

「はい。」

と恭うやうやしく帽を脱いだ、近頃は地方の方が夏帽になるのが早い。セルロイドの目金めがねを掛けている。

「ええ、大割引で勉強をしとるです。で、その、ちよつとあらか

じめ御諒解を得ておきたいのですが、お客様が小人<sup>こにんず</sup>数で、車台が透いております場合は、途中、田舎道、あるいは農家から、便宜上、その同乗を求めらるる客人がありますと、御迷惑を願う事になつていたのでありますが。」

「ははあ、そんな事だろうと思つた。どうもお値段の塩梅<sup>あんばい</sup>がね。」

女中も帳場も皆笑つた。

ロイドめがねを真<sup>まん</sup>円<sup>まる</sup>に、運転手は生真<sup>きま</sup>面目<sup>じめ</sup>で、

「多分の料金をお支払いの上、お客様がですな、一人で買切つておいでになりますも、途中、その同乗を求むるものをたつて謝絶いたしますと、独占的ブルジョアの横暴でもありますかのよ

うに、階級意識を刺戟しまして——土地が狭いもんですから——われわれをはじめ、お客様にも、敵意を持たれますというところ、何かにつけて、不便宜、不利益であります処から。……は。」

「分りました、ごもつともです。」

「ですが、沿道は、全く人通りが少いのでして、乗合といつてもめつたにはありません。からして、お客様には、事実、御利益になつておりますのでして。」

「いや、損をしても構いません。妙齡としごろの娘か、年増べっぴんの別嬪だと、かえつてこつちから願いたいよ。」

「……運転手さん、こちらはね、片原へ恋人に逢いにいらつしやつたんだそうですから。」

しっぺい返しに、女中にトンと背中を一つ、くらわされて、そのはずみに、ひよいと乗った。元来おもみのある客ではない。

「へい御機嫌よう……お早く、お帰りにどうぞ。」

番頭の愛想を聞流しに乗って出た。

惜おしいかな、阿武隈川あぶくまの川筋は通らなかつた。が、県道へ掛かつて、

しばらくすると、道の左右は、一様に青葉して、梢こずえが深く、枝が

茂つた。一里ゆき、二里ゆき、三里ゆき、思いのほか、田畑も見

えず、ほとんど森林地帯はしを馳はしる。……

座席の青いのに、濃い緑が色を合わせて、日の光は、ちらちらと銀の蝶の形して、影も翼も薄青い。

人じん、馬ば、時々飛とび々とびに数えるほどで、自動車の音は高く立ちな

がら、鳴く音はもとより、ともすると、驚いて飛ぶ鳥の羽音が聞こえた。

一二軒、また二三軒。山吹、さつきが、淡い紅に、薄い黄に、その背戸、垣根に咲くのが、森の中の夜が明けかかるように目に映ると、同時に、そこに言合せたごとく、人影が顕われて、門に立ち、籬に立つ。

村人よ、里人よ。その姿の、轍の陰にかくれるのが、なごり惜いほど、道は次第に寂しい。

宿に外套を預けて来たのが、不用意だったと思うばかり、小具は、幾度も襟を引合わせ、引合わせしたそうである。

この森の中を行くような道は、起伏凹凸が少く、坦だった。が

しかし、自動車の波動の自然に起るのが、波に揺らるるようではない。埃ほこりも起たたず、雨のあとの樹立こだちの下は、もちろん濡色はるかが遙はるかに通つていた。だから、偶たまに行逢う人も、その村の家も、ただ漂たうたう々たうたうとして陰気な波に揺られて、あとへ、あとへ、漂つて消えて行くから、峠うえしたの上、下、並木の往来で、ゆき迎え、また立顧たてかんみる、旅人同士とは品かわつて、世をかえても再び相逢うすべのないような心細さが身に沁しみみたのであつた。

かあ、かあ、かあ、かあ。

鈍くて、濁つて、うら悲しく、明るいようで、もの陰気で。

「鳥がなくなあ。」

「群れておるです。」



運転手は何を思ったか、口笛を高く吹いて、

「首くくりでもなけりやいいが、道端の枝に……いやだな。」

うっかり緩めた把手ハンドルに、衝つと動きを掛けた時である。ものの

二三町は瞬く間だ。あたかもその距離の前途ゆくての右側に、真赤まっかな人

のなりがふらふらと立揚たちあがった。天象、地気、草木、この時に当

つて、人事に属する、赤いものと言え、読者は直ちに田舎娘の

姨おば見舞か、酌婦みちゆきぶりの道行振を瞳に描かるるであろう。いや、いや、

そうでない。

そこに、就なかんずく 中 巨大なる杉の根に、揃つつて、踞つくばつていて、い

ま一度に立揚つつたのであるが、ちらりと見た時は、下草をぬいて

燃ゆる躑躅つづじであろう——また人家がある、と可懐なつかしかった。

自動車がハタと留まつて、窓を赤く蔽うまで、むくむくと人数  
 が立ちはだかつた時も、齊しく、躑躅の根から湧上つたもの  
 ように思われた。五人——その四人は少年である。……とし十一  
 二三ばかり。皆真赤なランニング襯衣で、赤い運動帽子を被つて  
 いる。彼等を率いた頭目らしいのは、独り、年配五十にも余るで  
 あろう。脊の高い瘡男やせおとこの、おなじ毛糸の赤襯衣を着込んだの  
 が、緋ひの法衣ころもらしい、坊主袖の、ぶわぶわするのを上に絡まとつて、  
すね脛を赤色の巻きゲートル。赤革の靴を穿はき、あまつさえ、リボン  
 でも飾つた状さまに赤木綿おおいの蔽を掛け、赤い切きれで、みしと包んだヘル  
 メット帽を目深まぶかに被つた。……

頤骨あごほねが尖とがり、頬がこけ、無性髯ぶしようひげがざらざらと疎あらく黄味を帯

び、その蒼黒あおぐろい面かお色の、鉤鼻かぎばなが尖つて、ツンと隆たかく、小鼻  
ばかり光沢つやがあつて蠟色ろういろに白まなじりい。眦まなじりが釣り、目が鋭く、血の筋  
が走つて、そのヘルメット帽の深い下には、すべての形容につい  
て、角が生えていそつで不気味に見えた。

この頭目、赤せき色しよくの指導者が、無遠慮に自動車へ入ろうとし  
て、ぎろりと我が銚吉を視みて、胸むなさきで、ぎしと骨張つた指を組  
んで合掌した……変だ。が、これが礼らしい。加うるに慇懃いんぎんな  
る会釈だろう。けれども、この恭屈頂礼をされた方は——また勿  
論されるわけもないが——胸ひつを引搔かいて、腸はらわたでもむしるのに、引導  
を渡されでもしたようで、腹へ風とおが徹つて、ぞつとした。

すなわち、手を挙げるでもなし、声を掛けるでもなし、運転手

に向つてもまた合掌した。そこで車を留めたが、勿論、拝む癖に傲然ごうぜんたる態度であつたという。それもあとで聞いたので、小鼻がぞつとするまで、不思議に不快を感じたのも、赤いちんにゆうしゃ闖入者ちんが、再び合掌して席へ着き、近々と顔を合せてからの事であつた。樹から湧こうが、葉から降ろうが、四人の赤い子供を連れた、その意匠、右の趣向の、ちんどん屋……と奥筋でも称となうるかどうかは知らない、一種広告隊の、林道を穿うがつて、赤五点、赤長短、赤大小、点々として顕われたものであろう、と思つたと言うのである。

が、すぐその間違いが分つた。客と、銚吉との間へ入つて腰を掛けた、中でも、脊のひよろりと高い、色の白い美童だが、疝かんの

虫のせいであろう、……優しい眉と、細い目の、ぴりぴりと昆虫の触角のごとく絶えず動くのが、何の級に属するか分らない、折つて畳んだ、猟銃の赤なめしの袋に包んだのを肩ななめに斜に掛けている。且つこれは、乗込もうとする車の外で、ほかの少年の手から受取つて持替えたものであつた。そうして、栗鼠りすが（註、この篇の談者、小島凡杯は、兎のように、と云つたのであるが、兎は私が鼻ひいき尻ひいきだから、栗鼠りすにしておく。）後脚あとあしで飛ぶごとく、嬉しうに、匆はねつつ飛込んで、腰を掛けても、その、ぴよん、が留やまないではずんでいた。

——後に、四童、一老が、自動車自動車を辞し去つた時は、ずんぐりとして、それは熊のように、色の真ま黒くろな子供が、手がわりに銃

を受取ると齊ひとしく、むくむく、もこもこと、踊躍ようやくして降りたのを思うと、一具の銃は、一行の名誉と、衿きんしよく飾しよくの、旗はた表じるしであつたらしい。

獵期は過ぎている。まさか、子供を使つて、洋刀ナイフや空氣銃の宣傳をするのではあるまい。

いずれ仔細しさいがあるであろう。

ロイドめがねの黒い柄を、耳みみの尖さきに、？のように、振向いて運転手が、

「どちらですか。」

「ええ処で降りるんじや。」

と威圧するごとくに答えながら、双手を挙げて子供等を制した。

栗鼠ばかりでない。あと三個も、補助席二脚へ揉合もみあつて乗ると齊ひとしく、肩を組む、頬を合わせる、耳を引張ひっぱる、真赤まっかな洲浜形すはまがたに、鳥打帽を押合おつて騒いでいたから。

いましめ戒は顕われ、しつけは見えた。いまその一弾指のもとに、子供等は、ひっそりとして、エンジンの音立たちどころ処へに高く響くあるのみ。その静しずかさは小梟ただ一人の時よりも寂然ひっそりとした。

なぜか息苦しい。

赤い客は咳しわぶき一つしないのである。

小梟は窓を開放たてつつて、立続たてつけて巻まきたばこを吹かした。

しかし、硝子がらすを飛び、風に捲まいて、うしろざまに、緑林なびに靡なびく

煙は、我が単衣ひとえの紺のかすりになつて散らずして、かえつて一いちま

抹つの赤せつき氣きはらを孕はらんで、異類異形に乱れたのである。

「きみ、きみ、まだなかなかかい。」

「屋根が見えるでしょう——白壁が見えました。」

「留まれ。」

その町の端頭はずれと思う、林道の入口の右側の角に当る……人は棲すまぬらしい、壊屋こわれやの横羽目に、乾草ほしくさ、粗朶そだうずたかが堆い。その上に、惜おしむべし杉の酒林さかばやしの落ちて転んだのが見える、傍わきがすぐ空地の、草の上へ、赤い子供の四人が出て、きちんと並ぶと、緋この法こ衣ろもの脊高せみちが、枯れた杉の木の揺ゆらぐごとく、すくすくと通るに従したがつて、一列に直つて、裏の山へ、夏草なつこの径みちを縫ぬつて行く——この時だ。一番あとのずんぐり童子が、銃こを荷になつた嬉うれしさだろう、真赤



なおおきしり大な臀を、むくむくと振って、肩で踊って、

「わあい。」

と馬鹿調子のどら声を放す。

ひよろ長い美少年が、

「おうい。」

と途轍とてつもない奇声を揚げた。

同時に、うしろ向きの赤い袖ひるがえが翻つて、頭目は掌てのひらを口に当てた、  
 声おきを压えたのではない、笛を含んだらしい。ヒユウ、ヒユウと響くと、たちまち静しずかに、肅々として続いて行く。

すぐに、山の根に取着的た。が草深い雑木の根を、縦に貫く一列は、殿しんがりの尾の、ずんぐり、ぶつりとした大赤棟蛇おおやまかがしが畝うねるよう

で、あのヘルメットが鎌首によく似ている。

見る間に、山腹の真黒な一叢の竹藪を潜つて隠れた時、

「やーい。」

「おーい。」

ヒユウ、ヒユウと幽かすかに聞こえた。なぜか、その笛に魅せられて、

少年等が、別の世、別の都、別の町、あやしきかくれ里へ攫さらわれて行きそうで、悪酒に酔つたように、凡杯の胸は塞ふさがつた。

自動車たるべきものが、スピイドを何とした。

茫然ぼうぜんとした状さまして、運転手が、汚れた手袋の指の破れたのを

凝じつと視みている。——掌に、銀貨が五六枚、キラキラと光つたので

あつた。

「——お爺さん、何だろうね。」

「……………」

「私も、運転手も、現に見たんだが。」

「さればなす……………」

と、爺さんは、粉煙草こなたばこを、三度ばかりに火皿の大きなのに撮つまみ入れた。

……………根太の抜けた、荒寺の庫裡くりに、炉の縁で。……………

さいみようじ

西明寺——もとこの寺は、松平氏が旧領石州から奉搬の伝来で、土地の町村に檀家だんかがない。従つて盆暮のつけ届け、早い話がおとむらい一つない。如法によほうの貧地で、堂も庫裡も荒れ放題。いずれ旧藩中ばかりの石碑だが、苔こけを剥むかねば、紋も分らぬ。その墓地の凶面と、過去帳は、和尚が大切にしているが、あいにく留守。……

墓参のよしを聴いて爺さんが言ったのである。

「ほか寺の仏事の手伝いやら托鉢たくはつやらで、こちとら同様、細い煙を立てていなさるでなす。」

あいにく留守だが、そこは雲水、風の加減で、ふわりと帰る事もあるう。

「まあ一服さつせえまし、和尚様とは親類づきあい、渋茶をいれて進ぜますで。」

とにかく、いい人に逢った。爺さんは、旧藩士でもあんなさるかと聞くと、

「孫八とこいて、いやはや、若い時から、やくざでがしての。縁は異なるもの、はツはツはツ。お前様、曾祖父様ひいじいさまや、祖父様の背戸畑で、落穂を拾った事もあんべい。——鼠ねずみ棚みだな 搜いて麦こがしでも進ぜますだ。」

ともなわれて庫裡に居おる——奥州片原の土地の名も、この荒寺では、鼠棚がふさわしい。いたずらものが勝手に出入りではいをしそうな虫くい棚の上に、さつきから古木魚が一つあった。音も、形も

馴染なじみのものが、仏具だから、俗家の小唄は幼いいたずら時にも  
 まだ持つて見たことがない。手頃なのは大抵想像は付くけれども、  
 かこみほとんど二尺、これだけの大きさと、どのくらい重量めかたが  
 あろうか。普通は、本堂に、香華こうげの花と、香においの匂と明滅する処に、  
 章魚たこあぐら胡坐で構えていて、おどかして言えば、海坊主の坐禪のごと  
 し。……辻の地藏尊の涎よだれ掛かけをはぎ合わせたような蒲団ふとんが敷い  
 てある。ところを、大木魚の下に、ヒヤリと目に涼しい、薄色の、  
 一目見て紛まがう方なき女持ちの提紙ハンドバック入で。白い桔梗ききようと、水紅ときいろ色  
 の常夏とこなつ、と思つたのが、その二色ふたいろの、花の鉄線かずらを刺ししゆ  
 繡うした、銀座むきの至極当世な持もので、花はきりりとしてい  
 るが、葉も蔓つるも弱々しく、中のもも角ばらず、なよなよと、木

魚の下すべりに、優しい女の、帯の端を引伏せられたように見えるのであった。

はじめ小唄が、ここの崖を、墓地へ下りる以前に、寺の庫裡を覗いた時、<sup>ひとけ</sup>人氣も、火の気もない、<sup>そば</sup>炬の傍に一段高く破れ落ちた壁の穴の前に、この帯らしいものを見つけて、うつくしい女の、その腰は、袖は、あらわな白い肩は、壁外に逆になつて、<sup>くも</sup>蜘蛛の巣がらみに、<sup>あおじろ</sup>蒼白くくくられてでもいそうに思った。

瞬間の幻視である。<sup>てさげ</sup>手提はすぐ分つた。が、この荒寺、思いのほか、<sup>ぶじん</sup>陰寂な無人の僻地で——<sup>へきち</sup>頼もう——を我が耳で聞返したほどであつたから。……

私の隣の松さんは、熊野へ参ると、<sup>ゆ</sup>髪結うて、

熊野の道で日が暮れて、

あと見りや怖おそろしい、先見りやこわい。

先の河原で宿取るか、跡の河原で宿取るか。

さきの河原で宿取つて、鯰なますが出て、押えて、

手で取りや可愛いし、足で取りや可愛いし、

杓しゃくし子ですくうて、線香せんこで担になつて、燈心くくで括くくつて、

仏様のうしろで、一ひと切食ときれや、うまし、二切食や、うま

し……

紀州の毬まり唄うたで、隠微おんゑいな残ざん虐ぎやくの暗示がある。むかし、熊野

詣もうでの山道に行暮れて、古寺に宿を借りた、若い娘が燈心で括くくつて

線香で担たつて、鯰なますを食べたのではない。鯰の方が若い娘を、……



あととは言わずとも可<sup>よ</sup>かろう。例証は、遠く、今昔物語、詣鳥部寺女の語<sup>はなし</sup>にある、と小県はかねて聞いていた。

紀州を尋ねるまでもなからう。

……今年はじめて花見に出たら、寺の和尚に抱きとめられて、  
高い縁から突落されて、笄<sup>こうがい</sup>落し、小枕<sup>こまくら</sup>落し……

古寺の光景は、異様な衝動で渠<sup>かれ</sup>を打った。

普通、草双紙なり、読本なり、現代一種の伝奇においても、かかる場合には、たまたま来<sup>きた</sup>つて、騎士<sup>ナイト</sup>がかの女を救うべきである。が、こしらえものより毬唄の方が、現実を曝露<sup>ばくろ</sup>して、——女<sup>すみやか</sup>は速に虐<sup>しえた</sup>げられているらしい。

同時に、愛惜あいじやくの念に堪えない。ものあわれな女が、一切食われ一切食われ、木魚におき圧え挫ひしがれた、……その手提に見入つていたが、腹のすいた狼おおかみのように庫裡へ首を突つっこ込んでいて可いものか。何となく、心ゆかしに持つていた折おり鞆かばんを、縁側ずれに炉の方へ押入れた。それから、卵塔の草を分けたのであつた。——  
 一つは、鞆を提ひげて墓はかま詣まいりをするのは、事務を扱あうようで気がさしたからであつた。

今もある。……木魚の下に、そのままの涼しい夏草と、ちよろはげの鞆みくらとを見較くらべながら、

「——またその何ですよ。……待つていられては氣き忙せわしいから、帰りは帰りとして、自然、それまでに他ほかの客きやくがなかつたらお世話

になろう。——どうせ隙ひまだからいつまでも待とうと云うのを——  
 そういつてね、一旦いったん運転手に分れた——こっちの町尽頭はすれの、茶  
 店……酒場バアか。……ざつとまあ、饅頭屋うどんやだ。それから、見た目  
 にも道わるで、無理に自動車を通した処で、歩行あるくより難儀らし  
 いから下りたんですがね——饅頭酒場うどんバアの女給も、女房かみさんらしい  
 のも——その赤い一行は、さあ、何だか分らない、と言う。しか  
 し、お小姓に、太刀のように鉄砲を持たしていれば、大将様だ。  
 大方、魔ものか、変化にでも挨拶あいさつに行くのだろう、と言うんで  
 す。

魔ものだの、変化だのに、挨拶は変だ、と思ったが、あとで気  
 がつくと、女連れんは、うわさのある怪しいことに、恐しく怯おびえてい

て、陰でも、退治たいじるの、生掬いけどるのは言い憚はばかつたものらしい。がまあ、この辺にそんなものが居るのかね。……運転手は笑つていたが、私は真面目さ。何でも、この山奥に大沼というのがある？

……ありますか、お爺さん。」

「あるだ。」

その時、この気軽そうな爺さんが、重たく點頭した。

「……阿武隈川が近いによつて、阿武沼と、勿もつたい体つけるで、国々で名高い、湖や、潟ほど、大いなものではねえだがなす、むかしから、それを逢おうまぬま魔沼と云うほどでの、樹木しんしんが森々として凄すごいでや、めつたに人が行がねえもんだで、山奥々々というだがね。」

と額を暗く俯向うつむいた。が、煙管きせるを落して、門——いや、門も何もない、前通りの草の径こみちを、向うの原越しに、差覗さしのぞくがごとく、指をさし、

「あの山を一つ背後うしろへ越した処たんとだで、沢山たんと遠い処ではねえが。」  
 と言う。

その向う山の頂に、杉檜ひのきの森に包まれた、堂やしろ、社らしい一地がある。

「……途中でも、気が着いたが。」

水の影でも映りそうに、その空なる樹この間まは水色に澄んで青い。

「沼は、あの奥に当るのかね。」

「えへい、まあ、その辺の見当すら。」

と、掌をもじやもじやと振るのが、枯葉が乱れて、その頂の森を搔乱かきみだすように見え、

「何かね、その赤い化もの……」

「赤いのが化けものじゃあない——お爺さん。」

「はあ、そうけえ。」

と妙に気の抜けた返事をする。

「……だから、私が——じゃあ、その阿武沼、逢魔沼か。そこへ、

あの連中は行ったんだらうか、沼には変った……何か、可おそろし恐い、

可怪あやしい事でもあるのかね。饅飩酒場の女房が、いいえ、沼には牛

鬼が居るとも、大蛇おろちが出るとも、そんな風説うわさは近頃では聞きませ

んが、いやな事は、このさきの街道——なわて暇の中にあつた、という

んだよ。寺の前を通る道は、古い水戸街道なんだそうだね。」

「はあ、そうでなす。」

「ぬかるみを目の前にして……さあ、出掛けよう。で、ここへ私  
 が来る道だ。何が出ようとこの真昼間まっぴるま、気にはしないが、もの  
 好きに、どんな可おそろし恐い事があつたと聞くと、女給と顔を見合わ  
 せてね、旦那だんな、殿方には何でもないよ。アハハハと笑つて、陽気  
 に怯おどかす……その、その辺を女が通ると、ひとりでに押孕おっぱらむ……」

「馬鹿あこけ、あいつ等。」

と額しわにびくびくと皺しわを刻み、瘦腕やせうでを突張つっぱつて、爺は、彫刻の  
 ように堅くなつたが、

「あツはツはツ。」

唐突だしぬけに笑出した。

「あツはツはツ。」

たちまち口にふたをして、

「ここは噴出す処でねえ。麦こがしが消飛けしとぶでや、お前様もやらつせえ、和尚様の塩加減が出来とるで。」

欠茶碗にもりつけた麦こがしを、しきりに前刻さつきから、たばせた。が、匙さじは附木つけぎの燃さもえしである。

「ええ塩梅あんばいだ。さあ、やらつせえ、さ。」

搔かい候え、と言うのである。これを思うと、木曾殿の、搔食かわせた無塩ぶえんの平茸ひらたけは、碧澗へきかんの羹あつものであろう。が、爺おやさんの竈くど禿はげ



の針白髪はりしらは、阿倍の遺臣いひの概がいがあつた。

「お前様の前だがの、女が通ると、ひとりで孕むなぞと、うそにも女の身になつたらどうだんべいなす、聞かねえ分で居さつせえまし。優しげな、情じょうあい合あひの深い、旦那、お前様だ。」

「いや、恥かしい、情があるの、何のと言つて。墓詣りは、誰でもする。」

「いや、そればかりではねえ。——知つとるだ。お前様は人間扱いに、畜類ちくりゆうにもものを言わしつたら。」

「畜類ちくりゆうに。」

「おお、鷺さぎによ。」

「鷺さぎに。」

「白鷺に。<sup>なわて</sup> 暇<sup>なわて</sup>さ来る途中でよ。」

「ああ、知ってるのかい、それはどうも。」

四

——きみ、きみ——

白鷺に向つて声を掛けた。

「人に聞かれたのでは極<sup>きま</sup>りが悪いね……」

西明寺を志して来る途中、一処、道端の低い畝<sup>あぜ</sup>に、一<sup>ひとむら</sup>叢<sup>むら</sup>の緋<sup>ひ</sup>牡丹<sup>ぼたん</sup>が、薄曇る日に燃ゆるがごとく、二輪咲いて、枝の苔<sup>つぼみ</sup>の、撓<sup>たわわ</sup>なのを見た。——奥路に名高い、例の須賀川の牡丹園の花の香が

風に伝わるせいかも知れない、汽車から視<sup>なが</sup>める、目の下に近い、  
 門<sup>かど</sup>、背戸、垣根。遠くは山<sup>やますそ</sup>裾にかくれてた茅屋<sup>かやや</sup>にも、咲昇<sup>あおい</sup>る葵  
 を<sup>しの</sup>凌いで牡丹を高く見たのであつた。が、こんなに心易い処に咲  
 いたのには逢わなかつた。またどこにもあるまい。細竹一節<sup>かこい</sup>の囲  
 もない、酔える艶婦<sup>えんぶ</sup>の裸身である。

旅の袖を、直ちに蝶の翼に開いて——狐が憑<sup>つ</sup>いたと人さえ見な  
 ければ——もつとも四<sup>あたり</sup>辺に人影もなかつたが——ふわりと飛んで、  
 花を吸おうとも、荅を抱こうとも、心そのままに思われた。

それだのに、十歩……いや、もつと十間ばかり隔たつた処に、  
 銚吉が立<sup>たちど</sup>停まつたのは、花の荅を、蓑毛<sup>みのけ</sup>に被<sup>かつ</sup>いだ、舞の烏帽子<sup>えぼし</sup>の  
 ように翳<sup>かざ</sup>して、葉の裏すく水の影に、白鷺が一羽、婀娜<sup>あだ</sup>に、すつ

きりと羽を休めていたからである。

ここに一筋の小川が流れる。三尺ばかり、細いが水は清く澄み、瀬は立ちながら、悠揚として、さらさらと聞くほどの音もしない。山やまいり入の水源は深く沈んだ池沼ちしやうであろう。湖と言ひ、滝と聞けば、末の流ながれのかくまで静しずかなことはあるまいと思う。たとい地理にしていかなりとも。

——松島の道では、鼓草たんぼぼをつむ道草をも、溝を跨またいで越えたと  
 と思う。この水は、牡丹の叢むらのうしろを流れて、山の根に添つて荒れた麦畑の前を行き、一方は、角つのぐむ蘆あし、茅の芽の漂う水田であつた。

道を挟んで、牡丹と相向う処に、亜鉛トタンと柿こけらの継はぎなのが、と

もに腐れ、屋根が落ち、柱の倒れた、以前掛茶屋か、ちゆうじき中食であつたらしい伏屋の残骸ざんがいが、蓬よもぎの裡なかにのめつていた。あるいは、足休めの客の愛想に、道の対むこう側を花畑はなばたにしていたものかも知れない。流転のあとと、榮花の夢、軒は枯骨のごとく朽ちて、牡丹の膚はだは鮮紅である。

古蓑ふるみのが案山子かかしになれば、茶店の骸骨も花守をしていよう。煙は立たぬが、根太を埋めた夏草の露は乾かぬ。その草の中を、あたかも、ひらひら、と、ものの現うつつのように、いま生れたらしい蜻蛉とんぼが、群ぐんじよう青の絹糸うすあさぎに、薄浅葱うすあさぎの結び玉なぐれを目にして、綾あやの白しろ銀ぎんの羅うすものを翼うすものに縫い、ひらひら、と流ながれの方なたへ、葉はうつりを低ひくくして、牡丹ぼたんに誘よわれたように、道みちを伝つたつた。

またあまりに儂はかない。土に映る影もない。が、その影でさえ、触つたら、毒氣でたちまち落ちたろう。——  
 睨なわてみち道の真中まんなかに、別に、凄すさまじい虫が居た。

しかも、こつちを、銚吉の方を向いて、髯ひげをぴちぴちと動かす。一疋七八分にして、軀みは寸に足りない。けれども、羽あおみどりに碧緑の艶つや濃く、赤と黄の斑ふを飾つて、腹はらに光のある虫だから、留つた土が砥とになつて、磨いたように燦さんぜん然とする。葛上亭長ま、莞青あお、地胆つち、三種合わせた、猛毒はだえあわ、膚はに粟あわすべき斑はんみようの中の、最も普通な、みちおしえ、魔まの憑ついた宝石のように、炫ぎ耀げいと招いていた。

「——こつちを襲つて来るのではない。そこは自然の配剤だね。」

人が進めば、ひよいと五六尺退しよせつて、そこで、また、おいでおいでをしているんだ。碧緑赤黄の色で誘うのか知らん。」

蜻蛉では勿論ない。それを狙っているらしい。白鷺が、翼を開くまでもなかった。牡丹の花の影を、きれいな水から、すつと出て、斑いばの前ゆへ行くと思うと、約束通り、前途むこうへ退さがった。人間に對すると、その挙動は同おんなじ一らしい。……白鷺が再び、すつと進む。

あの歩あしの運びは、小股こまたがきれて、意気に見える。斑いばは、また飛びしきった。白鷺が道の中を。……

——きみ、——きみ——

「うっかり声を出して呼んだんだよ、つい。……毒虫だ、大毒だ。

きみ、嘔くわえてはいけないと。あの毒は大変です、その卵のくつついた野菜を食べると、血を吐いて即死だそうだ。

現に、私わたくしがね、ただ、触られてかぶれたばかりだが。

北国ほくこくの秋の祭——十月です。半ば頃、その祭に呼ばれて親類へ行つた。

白山宮はくさんぐうの境内、大きな手水鉢ちようずばちのわきで、人ごみの中だつたが、山の方から、颯さつと虫が来て頬へとまつた。指のさきで払い落したあとが、むずむずと痒かゆいんだね。

御手洗みたらしは清くて冷い、すぐ洗えばだつたけれども、神様の助けです。手も清め、口もそそぐ。……あの手をいきなり突つっこ込んだらどのくらい人を損そこなつたらう。——たとい殺さないまでもと思うと、



今でも身の毛が立つほどだ。ほてって、顔が二つになったほど幅  
 ったく重い。やあ、獅子ししのような面つらだ、鬼めんの面めんだ、と小児こどもたちに  
 囃はやされて、泣いたり怒ったり。それでも遊びにほうけていると、  
 清らかな、上品な、お神巫みこかと思う、色の白い、紅もみの袴はかまのお嬢さ  
 んが、祭の露店に売っている……山葡萄やまぶどうの、黒いほどな紫の実  
 を下すつて——お帰んなさい、水で冷すのですよ。

——で、駆戻ると、さきの親類では吃驚びっくりして、頭を冷して寝  
 かしたんだがね。客が揃って、おやじ……私の父が来たので、御ご  
 馳走ちそうの膳ぜんの並んだ隣へ出て坐った処、そこらを視みて、しばらくし  
 て、内の小僧は？……と聞くんだね。袖の中の子が分らないほど、  
 面つらが鬼になっていたんです。おやじの顔色が変わると、私も泣出し

た。あとをよくは覚えていないんだが、その山葡萄をしづくにしづくして、塗ったり吸ったりして無事に治った……虫は斑 だった事はいうまでもないのです。」

「何と、はあ、おつかねえもんだ、なす。知らねえ虫じゃねえでがすが、……もつとも、あの、みちおしえは、誰も触らねえ事にしてあるにはあるだよ。」

「だから、つい、声も掛けようではないか。」

「鷺の鳥はどうしただね。」

「お爺さん、それは見ていなかったかい。」

「なまけもんだ、陽気のよさに、あとはすぐとろとろだ。あの潰つぶぶれや屋の陰に寝ころばっておったもんだでの。」

白鷺はやがて羽を開いた。飛ぶと、宙を翔る威力には、とび退る虫が嘴に消えた。雪の蓑毛を爽に、もとの流の上に帰ったのは、あと口に水を含んだのであろうも知れない。諸羽を搏つと、ひらりと舞上る時、緋牡丹の花の影が、雪の頸に、ぼつと沁みて薄すくれない。紅がさした。そのまま山の端を、高く森の梢にかくれたのであつた。

「あの様子では確に呑んだよ、どうも殺られたらうと思うがね。」  
 爺は股引の膝を居直つて、自信がありそうに云つた。

「うんや、鳥は伶俐だで。」

「伶俐な鳥でも、殺生石には斃るじやないか。」

「うんや、大丈夫でがすべよ。」

「が、見る見るあの白い咽喉のどの赤くなつたのが可おそろし恐いよ。」

「とろりと旨うまいと酔うがなす。」

にたにたと笑いながら、

「麦こがしでは駄目だがなす。」

「しかし……」

「お前様、それにの、鷺はの、明神様のおつかわしめだよ、白鷺明神というだでね。」

「ああ、そうか、あの向うの山のお堂だね。」

「余り人の行くゆ処でねえでね。道も大儀だ。」

と、なぜか中を隔てるように、さしのぞ覗く小梟の目の前で、頭を振った。

明神の森というところ——あの白鷺はその梢へ飛んだ——なぜか爺が、まだ誰も詣でようとも言わぬものを、悪く遮りだてするらしいのに、反感を持つとまでもなかつたけれども、すぐにも出掛けたい気が起つた。黒塚の婆の納戸で、止むを得ない。

「——時に、和尚さんは、まだなかなか帰りそうに見えないね。とすると、位牌も過去帳も分らない。……」

「何しろ、この荒寺だ、和尚は出がちだよって、大切な物だけは、はい、町の在家の確かな蔵に預けてあるで。」

「また帰途に寄るとしよう。」

不意に立掛けた。が、見掛けた目にも、若い綺麗な人の持ものらしい提紙入に心を曳かれた。またそれだけ、露骨に聞くのが

櫛くすくつたかつたのを、ここで銚吉が棄すて鞭むちを打つた。

「お爺さん、お寺には、おかみさん、いや、奥さんか。」

小さな声で、

「おだいこくがおいでかね。」

「は、とんでもねえ、それどころか、檀那だんながねえで、亡者も居ね

え。だがな、またこの和尚が世棄人過ぎた、あんまり悟りすぎた。

参詣おなごしゆの女衆おなごしゆが、忘れたればとつて、預けたればとつて、あん

だ、あれは。」

と、せきこんで、

「……外廻りをするにして、要心に事を欠いた。木魚おしをおし置おしく

とは何あんたるこんだ。」

と、やけに突立つ膝がしらに、麦こがしの椀を炉の中へ突込んで、ぱつと立つ白い粉に、クシンと咽せたは可笑いが、手向の水の涸れたようで、見る目には、ものあわれ。

もくりと、搔落すように大木魚を膝に取って、

「ぼっかり押孕んだ、しかも大きい、木魚講を見せつけられて、

どんなにか、はい、女衆は恥かしかんべい。」

その時、提紙入の色が、紫陽花の浅葱淡く、壁の暗さに、黒髪も乱れつつ、産婦の顔の萎れたように見えたのである。

谷間の卵塔に、田沢氏の墓のただ一基苔の払われた、それを思え。

「お爺さん、では、あの女の持ものは、お産で死んだ記念の納も

のでももあるのかい。」

ベそかくばかりに眉を寄せて、

「牡丹に立つた白鷺になるよりも、人間は娑婆しやばが恋しかんべいに、産で死んで、姑獲鳥うぶめになるわ。びしよびしよ降ふりの闇暗くらやみに、若い女が青ざめて、腰の下さ血だらけで、あのこわれ屋の軒の上へ。

……わあ、情なさけない。……お救い下され、南無普門品なむふもんぼん、第二十五。」

と炉縁をずり直つて、たとえば、小県に股引の尻を見せ、向うむきに円く踞うづくまつたが、古寺の狸などを論ずべき場合でない——およそ、その背中ほどの木魚にしがみついて、もく、もく、もく、もく、と立てつけに鳴らしながら、

「南無普門品第二十五。」



「普門品第二十五。」

小県も、ともに口の裡うちで。

「この寺に觀世音。」

「ああ居らつしやるとも、難ありがた有たい、ありがたい……」

「その本堂に。」

「いや、あちらの棟だ。——ああ、参らつしやるか。」

「参ろうとも。」

「おお、いい事だ、さあ、ござい、ござい。」

と抱込んだ木魚を、もく、もくと敲たたきながら、足腰の頑丈づく

りがひよこひよこ前さきへ立たつた。この爺おやさん、どうかしている。

が、導かれて、御廚みずし子の前へ進んでからは——そういう小県が、

かえつて、どうかしないではいられなくなつたのである。

この庫裡くらりと、わずかに二棟、隔ての戸もない本堂は、置棚の真まんなか中に、名号みょうごうを掛けたばかりで、その外の横縁に、それでも形かたばかり階段が残つた。以前は橋廊下で渡つたらしいが、床板の折れひしや挫げたのを継合せに土に敷いてある。

明神の森が右の峰、左に、卵塔場を谷に見て、よく一人で、と思つばかり、前刻さつきたず々んだ、田沢氏の墓はその谷の草がくれ。

向うの階きざはしを、木魚あがが上る。あとへ続くと、須弥壇しゆみだんも仏具も何もない。白布おほを蔽うた台に、経机を据えて、その上に黒塗の御厨子があつた。

庫裡の炉の周囲まわりむしろは筵である。ここだけ畳を三畳ほどに、賽銭さいせん

の箱が小さく据つて、花瓶に雪を装つた一束の卯の花が露を含んで清々しい。根じめともない、三本ほどのチュリツプも、蓮華の水を抽んでた風情があつた。

勿体ないが、その卯の花の房々したのが、おのずから押になつて、御廚子の片扉を支えたばかり、片扉は、鎧の袖の断れたように摺れ下つていたのだから。

「は、」

ただ伏拝むと、斜に差覗かせたまうお姿は、御丈八寸、雪なす卯の花に袖のひだが靡く。白木一彫、群青の御髪にして、一点の朱の唇、打微笑みつつ、爺を、銚吉を、見そなわす。

「南無普門品第二十五。」

「失礼だけれど、准胝じゆんてい観音くわんおんでいらつしやるね。」

「はあい、そうだがすべ。和尚どのが、覚えにくい名とを称なえさつしやる。南無普門品第二十五。」

よし、ただ、南無とばかり称え申せ、ここにおわするは、除災、  
延命えんみょう、求児ぐうじの誓願ちかみ、擁護ようご愛愍あいみんの菩薩ぼさつである。

「お爺さん、ああ、それに、生意氣をいうようだけれど、これは素晴らしい名作です。私は知らないが、友達に大分出来る彫刻家があるのです、門前の小僧だ。少し分る……それに、よつほど時代が古い。」

「和尚に聞かして下つせえ、どないにか喜びますべい、もつとも前藩主せんとのさまが、石州からお守りしてござったとは聞いたりますかの

」

と及および腰こしに覗のぞいていた。

ろうそく

お蠟燭を、というと、爺が庫裡へ調達に急いだ——ここで濫みだりに火あつかいをさせない注意はもつともな事である——

「たしかに宝物。」

はばか

憚り多いが、靈容の、今度は、作を見ようとして、御廚子に寄せた目に、ふと卵の花の白い奥に、ものを忍ばすようにして、供物をした、二つ折の懷紙を視みた。備えたのはビスケットである。これはいささか稚氣を帯びた。が、にれぜん河がのほとり、菩提ぼだいじ樹ゆの蔭に、釈尊にはじめて捧げたものは何であろう。菩薩の壇にビスケットも、あるいは臘ろうはち八はちの粥かゆに増まさろうも知れない。しか

しこれを供えた白い手首は、野暮なレエスから出たらしい。勿論だ。意気なばかりが女でない。同時に芬ぶんと、媚なまめかしい白粉おしろいの薫かおりがした。

爺おやが居て気がつかかなかつたか。木魚を置いたわきに、三宝が据つて、上に、ここがもし閻魔堂えんまどうだと、女人を解いた生血あぶらと膩み肉まがに紛まがうであろう、生々なまなまと、滑なまなまかな、紅白の巻いた絹。

「ああ、誓願のその一、求児こそだて——子育こそだて、子安の觀世音として、ここに婦人の参詣がある。」

世に、参り合わせた時の順に、白は男、紅あかは女の子を授けらるる……と信仰する、觀世音のたまう腹帯である。

その三宝の端に、薄色の、折目の細い、女扇が、忘れたように

載っていた。

正面の格子も閉され、人は誰も居ない……そつと取ると、骨が水晶のように手に冷りひやとした。卵の花の影が、ちらちらと砂子を散らして、絵も模様も目には留まらぬさきに——せい……せい、と書いた女文字。

今度は、覚えまぶたずまぶた瞼まぶたが染まつた。

銑吉には、何を秘かくそう、おなじ名の恋人があつたのである。

## 五

作者は、小泉銑吉の話すまま、つい釣込まれて、恋人——と受

次いだが、大切な処だ。念のため断るが、銚吉には、はやく女房がある。しかし、女房があつて資産がない。女房もちのぜに銭なしが当世色恋の出来ない事は、昔といえども実はあまりかわりはない。打あけて言えば、かれ渠はただ自分勝手に、ほ惚れているばかりなのである。

また、近頃の色恋は、銀座であろうが、浅草であろうが、山の手新宿のあたりであろうが、つつしみが浅く、たしなみが薄くなり、次第に面の皮が厚くなり、恥が少なくなったから、惚れたというのにはばか憚ることだけは、まずもつてないらしい。

釣の道でも（岡）と称ながつくと軽かろんぜられる。銚吉のも、しかもその岡惚れである。その癖、なかま夥間で評判である。



この岡惚れの対象となって、江戸育ちだというから、海津か卵であろう、築地辺の川端で迷惑をするのがお誓さんで——実は梅水という牛屋の女中ねえさん。……御新規お一人様、なまで御酒ごしゅ……待った、待った。そ、そんなのじゃ決してない。第一、お客に、むらさきだの、鍋なべ下だのと、符帳でものを食うような、そんなのも決して無い。

梅水は、以前築地一流の本懐石、江戸前の料理人が庖丁を鑢さびさせない腕を研みがいて、吸ものの運びにも女中の裙すそさばきを睨にらんだ割烹かつぽう。震災後も引続き、黒堀の奥深く、竹も樹も静まり返つて客を受けたが、近代のある世態では、篝かがり火船ふねの白魚より、舶来みっつの塩しお鰯いわしが幅をする。正月飾りに、魚河岸に三個よりなかつた

という二尺六寸の海老を、緋緘ひおどしの鎧よろいのごとく、黒松の樽に緘し
 た一騎がけ駟まの商売では軍いくさが危きい。家の業わざが立ちにくい。がらりと氣
 を替かえて、こうべ肉にくのすき焼やき、ばた焼やき、お望のぞみ次第しだいに客きやくを呼よんで、
 抱ほう一上人いつにんの夕顔ゆげんを石燈籠いしどうろうの灯あかりでほの見みせる数寄屋すきやづくりも、
 七賢人しちけんの本床ほんどに立たつた、松林しょうりんの大広間おほひろまも、そのまま、びんちよ
 うの火うずたかを堆たかく、ひれの膏あぶらをにる。

この梅水うめみづのお誓ちかは、内うちの子こ、娘分むすめわけであるという。来たのは十三
 で、震災しんさいの時は十四であつた。繰返くりかへしていうでもあるまい——あ
 の炎えんの中なかを、主人しゅじんの家うちを離はなれないで、勤こめ続つけた。もつとも孤みなし
 児こ同然どうぜんだとのこと、都みやこにしかるべき身内みうちもない。そのせいか、
 沈しずんだ陰氣かげきな質たちではないが、色の、抜ぬけるほど白しろいのに、どこか

寂しい影が映る。膚はだをいえば、きめが細こまく、実際、手首、指の尖さきまで化粧をしたように滑らかに美しい。細面で、目は、ぱつちりと、大きくないが張はりがあつて、そして眉が優しい。緊しまつた口許くちもとが、莞爾にっこりする時ちよつとうけ口のようになつて、その清い唇の左へ軽く上るのが、笑顔ながら凜りんとする。総てが薄手で、あり余る髪の毛ぼつたく見えないのは、癖がなく、細く、なよなよとしているのである。緋ひも紅も似合うものを、浅葱だの、白の手絡てがらだの、いつも淡泊あつさりした円鬘まるまげで、年とし紀は三十を一つ出た。が、二十四五の上には見えない。一度五月の節句に、催しの仮装の時、水髪の芸子島田に、青い新藁しんわらで、五尺の菖蒲あやめの裳もすそを曳ひいた姿を見たものがある、と聞く。……貴殿はいい月日の下に生れたな、

と言わねばならぬように思う。あるいは一度新橋からお酌で出たのが、都合で、梅水にかわつたともいうが、いまにおいては審つまびらかでない。ただ不思議なのは、さばかりの容きりよう色で、その年まで、いまだ浮気、あらわに言えば、旦那があつたうわさを聞かぬ。ほかは知らない、あのすなおな細い鼻と、口許がうそを言わぬ。——お誓さんは処女だろう……（しばらく）——これは小峴銚吉の言うところである。

十六か七の時、ただ一度——場所は築地だ、家は懐石、人も多いに、台所から出入りの牛乳屋ちちやの小僧が附ぶみをした事のあるのを、最も古くから、お誓をひいき鬚貞の年配者、あたまのきれいには元げた粹人が知っている。梅水の主人夫婦も、座興のように話をする。

ゆらの戸の歌ではなけれど、この恋の行方は分らない。が、あいて対手が牛乳屋の小僧だけに、天使と牧童のおとぎばなし伽話を聞く気がする。ただその玉章たまずさは、お誓の内証ないしよの針箱にいまも秘めてあるらしい。……

「……一生の願ねがいに、見たいものですな。」

「お見せしましょうか。」

「恐らく不老長寿の薬になる——近頃はやる、性の補強剤に効能の増まさること万々だろう。」

「それでしょうか。」

その頬が、白く、涼しい。

「見せろよ。」

低い声の澄んだ調子で、

「ほほほ。」

と莞爾にっこり。

その口許の左へ軽くしまるのを見るがいい。……座敷へ持出さないことは言うまでもない。

色氣の有無ほどが不可解である。ある種のうつくしいものは、神が惜おしんで人に与えない説がある。なるほどそういえば、一方円満柔和な婦人に、菩薩相ぼさつそうというのがある。続いて尼僧顔がないでもあるまい。それに対して、お誓の処女みこづくつて、血の清澄せいしようめい明めい晰せきな風情に、何となく上等の神巫みこの麗女たおやめの面影が立つ。

——われ知らず、銚吉のかくれた意識に、おのずから、毒虫の

毒から救われた、うつくしい神巫おみこの影が映るのであろう。――

おお美わしのおとめよ、と賽銭さいせんに、二百金、現に三百金ほどを包んで、袖ていに呈するものさえある。が、お誓はいつも、そのままお帳場へ持って下つて、おかみさんの前で、こんなもの。すぐ、おかみさんが、つつと出て、お給仕料は、お極きまりだけ御勘定の中に頂いてありますから。……これでは、玉の手を握ろう、紅もみはかまの袴を引こうと、乗出し、泳上る自信やからこうべの輩しでゆの頭を、幣結さかきうた櫛しでゆをもつて、そのあしきを払うようなものである。

いわんや、銚吉のごとき、お月掛うしこなみの氏子うしこをや。

その志を、あわれむ男が、いくらか思おもを通わせてやろうという  
 気で。……

「小島の惚れ方は大変だよ。」

「……………」

「嬉しいだろう。」

「ええ。」

目で、ツンと澄まして、うけ口をちよつとしめて、にっこり莞爾……

「嬉しいですわ。」

しかも、銚吉が同座で居た。

余計な事だが——一説がある。お誓はうまれが東京だというのに「嬉しいですわ。」は、おかしい。この言葉づかいは、銀座あるきの紳士、学生、もっぱら映画の弁士などが、わざと粋がつて「避暑に行ったです。」「アルプスへ上るです。」と使用するが、



元来は訛なまりである。恋われて——いやな言葉づかいだが——挨拶あいさつをするのに、「嬉しいですわ。」は、嬉しくない、と言うのである。

紳士、学生、あえて映画の弁士とは限らない。梅水の主人は趣味が遍あまねく、客が八方に広いから、多方面の芸術家、画家、彫刻家、医、文、法、理工の学士、博士、俳優、いずれの道にも、知名の人物が少くない。揃った事は、婦人科、小児科、齒科もある。申しおくれました、作家、劇作家も勿論ある。そこで、この面々が、年齢の老若にかかわらず、東京ばかりではない。のみならず、ここさらに、江戸がるのを毛嫌いして「そうです。」「のむです。」  
を行やる名士が少くない。純情無垢むくな素質であるほど、ついその訛なまり

がお誓にうつる。

浅草寺の天井の絵の天人が、蓮華の盥たらいで、肌脱ぎの化粧をしな  
 がら、「こウ雲助どう、こんたア、きよう下界へでさっしやるな  
 ら、京橋の仙女香を、とつて来ておくんなんし、これサ乙女や、  
 なによウふぎけるのだ、きりきりきようでえをだしておかねえか  
 。」（○註に、けわい坂さか——実は吉原——近所だけか、おかしな  
 ことばが、うつつていたまう、）と洒落しやれつつ敬意を表した、著  
 作の実例がある。遺憾いかんながら「嬉しいですわ。」とはかいてない。  
 けれども、その趣はわかると思う。またそれよりも、真珠の首飾  
 見たようなものを、ちよつと、脇の下へずらして、乳首をかくし  
 たはだ膚を、お望みの方は、文政壬みずのえ辰たつ新板、柳亭種彦作、歌川国

貞画えがく——奇妙頂礼きみょうちようらい地藏ぢいざいの道行——を、ご一覽になるがいい。

通り一遍の客ではなく、梅水の馴染なじみで、昔からの鼻肩ひいき連が、六七十人、多い時は百人に余る大一座で、すき焼で、心置かず隔てのない月並の会……というと、俳人には禁句らしいが、そこらは凡杯で悟っているから、一向に頓とんじやく着やくしない。先輩、また友達に誘われた新参で。……やつと一昨年の秋頃だから、まだ馴染も重ならないのに、のっけから岡惚れした。

「お誓さん。」

「誓ちゃん。」

「よう、誓の字。」

いや、どうも引手あまたで。大連が一台ずつ、黒塗まんなまり真円まんまるな

大円卓を、ぐるりと輪形に陣取つて、清正公には極ごく内ないだけれども、これを蛇の目の陣と称とえ、すきを取つて平らげること、焼やけや山越まごえの蟒蛇うわばみの比にあらず、朝鮮蔚山うるさんの敵軍へ、大砲を打込むばかり、油の黒煙を立てる裡なかで、お誓を呼立つること、矢叫びあひびに相あひひしい。名を知らぬものまで、白く咲いて楚々そそとした花には騒ぐ。

巨匠にして、超人と称えられる、ある洋画家が、わが、名によつて、お誓をひき寄せ、銑吉かたわらを傍かたわらにして、

「お誓さんに是非というのだ、この人に酌をしておあげなさい。」  
「はい。」

が、また娘分に仕立てられても、奉公人の謙讓があつて、出過

ぎた酒場の給仕とは心得が違うし、おなじ勤めでも、芸者より一歩退つて可憐しい。

「はい、お酌……」

「感謝します、本懐であります。」

景物なしの地位ぐらいに、句が抜けたほど、嬉しがつたうちはいい。

少し心安くなると、蛇の目の陣に恐をなし、山の端の霧に落ちて行く——上、藤のような優姿に、野声を放つて、

「お誓さん、お誓さん。姉さん、姐ご、大姐ご。」

立てごかしに、手繰りよせると、酔つた赤づらの目が、とろんこで、

「お酌を頼む。是非一つ。」

このねだりものの澆<sup>わるざる</sup>猴、魔界の艶夫人に、芭蕉扇を、貸さずば、奪わむ、とする擬勢を顕<sup>あら</sup>わす。……博識にしてお心得のある方々は、この趣を、希臘<sup>ギリシア</sup>、羅馬<sup>ロオマ</sup>の神話、印度の譬諭<sup>ひゆきよう</sup>経にでもお求めありたい。ここでは手近な絵本西遊記で埒<sup>うち</sup>をあける。が、ただ先哲、孫呉空は、蝮<sup>ごまむし</sup>蝮虫と変じて、夫人の腹中に飛び込んで、痛快にその臟腑<sup>ぞうふ</sup>を抉<sup>えぐ</sup>るのである。末法の凡<sup>のど</sup>俳は、咽喉までも行かない、唇に触れたら酸漿<sup>ほおずき</sup>の核<sup>たね</sup>ともならず、溶<sup>とろ</sup>けちまおう。

ついでに、おかしな話がある。六七人と銚吉がこの近所の名代の天麩羅<sup>てんぷら</sup>で、したたかに食<sup>くら</sup>い且つ飲んで、腹こなしに、ぞろぞろと歩行<sup>あるき</sup>出して、つい梅水の長く続いた黒塀に通りかかった。

盛り場でも燈ともしびを沈め、塀の中は植込しんで森と暗い。処で、相談を掛けてみたとか、掛けてみるまでもなかったとかいう。……天麩羅のあとで、ヒレの大切れのすき焼は、なかなか、幕下でも、前頭でも、番附か逸話に名の出るほどの人物でなくてはあしらい兼ねる。素通りをすることになった。遺憾さに、内は広し、座敷は多し、程は遠い……

「お誓さん。」

黒塀を——惚れた女に洋ステッキ杖は当てられない——斜ななめに、トンと腕で当てた。当てると、そのまくれた二の腕に、お誓はだの膚が透通つて、真まっしろ白に見えたというのである。

銚吉の馬鹿を表わすより、これには、お誓の容色の趣しを偲しのばせ

るものがあるであろう。

ざつと、かくの次第であつた処——好事魔多しというではなけれど、右の澆わるざる猴は、心さわがしく、性急だから、人さきに会あひに出掛けて、ひとつ蛇の目を取巻くのに、度たびかさなるに従つて、自然とおなじ顔が集るが、星座のこの分野に当つては、すなわち夜よ這星ばいぼしが真まっさき先に出向いて、どこの会でも、大抵点燈ひともしごろ頃が寸法であるのに、いつも暮まえ早くから大広間の天井下に、一つ光つて……いや、光らずに、ぽつんと黒く、流れている。

勿論、ここへお誓が、天女の装よそおいで、雲に白足袋で出て来るような待遇では決してない。

その愚劣あわれさを憐あわれんで、この分野の客星たちは、他ほかより早く、輝



いて頭あられる。輝くばかりで、やがて他の大一座が酒池肉林となつても、ここばかりは、畳わらびに蕨わらびが生えそうに見える。通りかかった女中に催促すると、は、とばかりで、それきり、寄りつかぬ。中でも活潑なのは、お誓さんでなくつてはねえ、ビーと外それてしまふ。またそのお誓はお誓で、まず、ほかほかへ皿小鉢、銚ちよう子しを運ぶと、お門かどが違ちがひましよう。で、知りませんと、鼻をつまらせ加減に、含はにか羞かんで、つい、と退のくが、そのままでは夜這星の方へ来にくくなつて、どこへか隠れる。ついお銚子が遅くなつて、巻煙草の吸殻ばかりが堆うずたかい。

何となく、ために気がとがめて、というのが、会が月の末に当るので、懐ふとこ中勘定によつたかも分らぬ。一度、二度と間を置く

うち、去年七月の末から、梅水が……これも近頃各所で行われる……近くは鎌倉、熱海。また軽井沢などへ夏季の出店でみせをする。いやどこも不景気で、大したほまちにはならないそうだけれど、差引一ぱいに行けば、家族が、一夏避暑をする儲けがある。梅水は富士の裾野すその——御殿場へ出張した。

そこへ、お誓が手伝いに出向いたと聞いて、がっかりして、峰は白雪、麓ふもとは霞だろう、とそのまま夜這星の流れで消えたのが——もう一度いおう——去年の七月の末頃であった。

この、六月——いまに至るまで、それ切り、その消息を知らなかったのである。

もし梅水の出店をしたのが、近い処は、房総地方、あるいは軽

井沢、日光——塩原ならばいうまでもない。地の利によらないことは、それが木曾路でも、ふとすると、こんな処で、どうした拍子、何かの縁で、おなじ人に、逢うまじきものでもない、と思つたろう。

フランス  
仏蘭西の港で顔を見たより、  
スイツツル  
瑞西の山で出会つたのより、

思掛けなさはあまりであつたが——ここに古寺の觀世音の前に、紅白の絹に添えた扇子おうぎの名は、築地の黒塀を隔てた時のようではない。まのあたりその人に逢つたようで、単衣ひとえの袖も寒いほど、しみじみと、熟じつと視みた。

たちまち、たいまつ炬のごとく燃ゆる、おもほてりを激しく感じた。

爺さんが、庫裡くりから取つて来た、燈明の火が、ちらちらと、

「やあ、見るもんじゃねえ。」

その、扇子を引つたくと、

「あなたよ、こんなものを置いとくだ。」

と叱るようにいって、開いたまま、その薄色の扇子で、木魚を伏せた。

極きまりも悪いし、叱られたわんぱくが、ふてたように、わざとらしく祝していった。

「上へのつけられたより、扇で木魚を伏せた方が、女が勝つたよ  
うで嬉しいよ。」

「勝つも負けるも、女は受身だ。隠すにも隠されましねえ。」

どかりと尻をつくと、鼻をすすって、しくしくと泣出した。

青い煙の細くなびく、蠟燭の香の沁しむ裡なかに、さつきから打ちかさねて、ものの様子が、思わぬかくし事に懐かい妊にんしたか、また産後か、おせい、といううつくしい女一人、はかなくなつたか、煩ろうて死のうとするか、そのいずれか、とフト胸がせまつて、涙ぐんだ目を、たちまち血の電光のごとく射たのは、林間の自動車に闖ちん入にゆうした、五体個々にして、しかも畝うねり繋つながつた赤色の夜叉やしやである。渠等かれらこそ、山を貫うぎ、谷を穿うつて、うつくしい犠牲を獵かるらん。飛天の銃は、あの、清く美しい白鷺を狙うらしく想わるとともに、激毒を啣ふくんだ靈鳥は、渠等かれらに対していかなる防禦をするであろう、神話のごとき戦は、今日の中うちにも開かるるであらう。

う。明神の晴れたる森は、たちまち黒雲に蔽おおわるるであらうも知れない。

銚吉は、少からず、猟奇の心に駆られたのである。

同時にお誓ちかがうつくしき鳥と、おなじ境遇に置かるるもののように、衝つと胸を打たれて、ぞつとした。その時、小枝が揺れて、卯の花が、しろじろと、細く白い手のように、銚吉の膝すに縋すがった。

昭和八（一九三三）年一月

# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成9」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年6月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日発行

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年3月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。



# 燈明之卷

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>